

箏によるラーガ、インドで人気!

日本のハードとインドのソフトが結ぶアジアの音楽芸術——T.M.・ホフマン

4歳より愛奏の楽器ピアノは「旋法に向いていない」ことを自らの指と耳で確認した。同様に、和楽器による洋楽が「木に竹を接ぐ」ように聴こえる。けれど、幸いにもハード「楽器」とソフト「音」が適合する相手が近くにあった。

尺八で学位取得

音楽に専念するアジア滞在36年の間で、和楽器とインドの旋法ラーガという組み合わせに着目して、感激を覚えた。日本で尺八の稽古を積み邦楽の研究を経て、1985年にインド最大の音楽大学



(上)南インドの国際音楽会議で「和楽器によるインド音楽」発表の後、女子芸術大学生が感激して箏に集まる(Tamil Nadu州Kalai Kaviri Collegeにて)。

(下)北インド最大の音楽大学にて3年間、継続的に箏によるラーガを講習。

に留学した。旋律とリズム中心の奥深い理論体系と即興演奏技術を誇るインド古典音楽、5年間で師範・修士取得を心かけた。声楽の稽古だけでも時間に追われていたが、インド笛の実技試験に特別許可を得て日本の尺八を使って臨み、ついに初めてアジア他国の楽器による学位取得となった。

箏に合うインド音楽

尺八が1992年より正式にインド音楽の楽器として認められたのだが、旋法に最も適した楽器は箏である。インド

楽器シタールなどを越えるほど箏は柔軟で多様な調弦法や奏法が可能で、ラーガの演奏に将来を明るくする楽器である。最近、インドの教員や名手さえも言う。その背景には、インドの大学や稽古場でも実施した「日本の箏とインドのラーガ」という企画がある。全米大学連盟でもある米国インド学会の芸術創造開発支援事業として取り上げられ、2007年の日印交流年(日印文化協定締結50周年)を以て06年7月〜08年1月の18ヵ月に及ぶ催しだった。

日本人とインド人が実施すれば最適

だろうが、そういう人はいない。私は大学教員の職を放棄し、2度目の日印音楽の長期企画の旅に出かけた。学会からの支援のほとんどを箏3面に換えてインドの大学と音大に寄贈し、現地の学生・教員と共同R&D(研究開発)に挑戦した。

音楽大因インド各州を回る。小学生〜大学院生、大衆・専門家、知的障害者〜知的階級、個人〜大勢の対象者に新奏法による箏は大人気を呼んだ。教員・学生向け講演やワークショップは国立・州立・私立大学と音楽大学で14カ所、小中高등학교で3カ所、名演奏家の稽古所で4カ所行



国立デリー大学にて大学院生の講習会

った。私の母校である音楽大学では、5回・計10日間のワークショップの結果として09年3月より箏がインド楽器として器楽科コースに設けられることになった。期間中、和楽器とラーガ中心の20人余りの現地の共演者との公演も取材されて、テレビ放送(全国6回、地方4回)および数多くの新聞記事が取り上げた。その一部は、www.ijmea.comに載っている。

インドに好奇心、日本に警戒心

現地での演奏と講演の反響は、南インド音楽研究の第一人者や北インド声楽家および共演者、そして文化行政担当者、在インド米国外務省や日本領事館などから受けた助言が印象的だが、「ラーガ」と和楽器の元の根拠地、日本はどうか、とよく聞かれる。日本のハードとインドのソフトは自然に合うのだが、芸術と人間

の間に様々な要素が微妙に影響し合う。インドに長期滞在したとき、また1989年より当日印音楽交流会の諸企画

(T.M.・ホフマン)

●T. M. Hoffman: 1951年米国生まれ。尺八を山口五郎、インド古典音楽をGanesh Prasad Mishraに師事。NPO「日印音楽交流会」(1989年創立)代表として国内外の音楽企画を実施。2008年3月外務省「日印交流年事業」として南インド4公演(日本4人+インド4人)、7〜8月国際会議・音楽祭「アジアとアフリカ」と在インド米大使館主催9公演に出演。
●日印音楽交流会: 〒370-2604 群馬県甘楽郡下仁田町吉崎130 Tel/Fax 0274-82-3160 e-mail:ijmusath@po.wind.ne.jp website: http://www.ijmea.com

Patrika 新聞 2008 年 8 月 4 日

पत्रिका

भोपाल, सोमवार, 4 अगस्त 2008

जापानी वाद्यों पर छेड़ा भारतीय संगीत

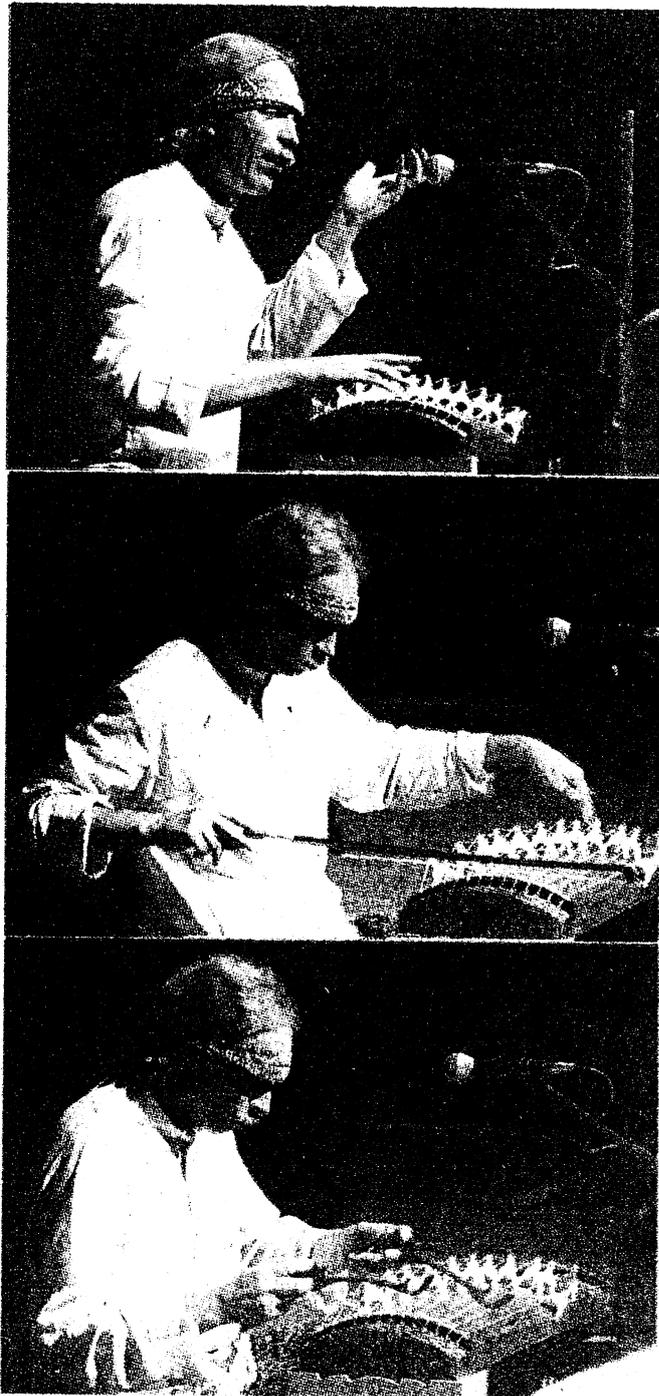
भोपाल। रविवार की शाम भारतीय शास्त्रीय संगीत के उस पहलू के नाम रही, जिसमें संगीत की एक वैश्विक परिभाषा स्थापित होती है। कलाओं की कोई भौगोलिक सीमा नहीं होती। कम से कम अमरीकन संगीतकार टी.एम. हॉफमेन के भारतीय संगीत के प्रति रुझान को देखते हुए तो यही महसूस हुआ। रविवार को भारत भवन में आयोजित संगीत सभा में हॉफमेन ने अपनी बहु आयामी संगीत प्रस्तुतियां दी।

इस मौके पर उन्होंने भारतीय शास्त्रीय शैली में गायन और वादन करके कला रसिकों का मन मोह लिया। हॉफमेन ने अपने कार्यक्रम की शुरुआत श्रीराम चंद्र कृपालु भजमन जैसे भजन से की। उसके बाद उन्होंने क्रमशः तुमरी मिश्र खमाज में धर-धर धरनियां सैया भये जोगिया व दादरा में रिमझिम बरसत बदरिया गाया। लंबे अर्से से भारतीय व जापानी संगीत का अध्ययन करने वाले हॉफमेन ने अपनी इस प्रस्तुति में जापानी तंत्रिवाद्य कोटो का प्रयोग किया।

हॉफमेन ने जापानी बांसुरी शाकुहाची पर राग हंसध्वनि प्रस्तुत की। अंत में तंत्रिवाद्य कोटो पर राग भैरवी प्रस्तुत की। उनके साथ सारंगी पर संगत सरवर हुसैन ने तथा तबले पर नफीस अहमद ने की। इस मौके पर बड़ी संख्या में संगीत प्रेमी मौजूद थे।

で日本人14人のインド訪問 インド人16人の日本招聘を実施したときのことを振り返ってみると、多民族国家インドに好奇心、単民族国家日本に警戒心という傾向が目立つ。前もって計画するよりも変更に通が利くインド人、そして計画に強いが変更に対応し難い日本人を比較すれば、前者は展開の速い環境および即興演奏に向いた精神だと言える。20年間も「火と氷」の間に立つ私には多種多様な狂わせは大変勉強になった。

元々アジア大陸の楽器類が逆輸入されて南アジアや中東の旋法と交わり、即興の楽器として活躍が期待される現在、私は以前からの欧米の大学、世界音楽連盟、米国際放送局VOAなどでの好評を経て、今年の10月中に米国にて民族音楽学会総会と東部の諸大学を中心に発表することとなっている。インド航空、邦楽ジャーナルなど、これまでの日印音楽共同企画に長期にわたり寛大に力を貸して下さった方々に深く感謝しながら、日本国内に和楽器の視野がもっと多方面に広がることを楽しみにしている。



भारत भवन में प्रस्तुति देते अमरीकन संगीतकार टी.एम. हॉफमेन।

पत्रिका

インド国 Bhopal 市 Bharat Bhavan 会館にて

「和楽器によるインド音楽」公演 (2008 年 8 月 3 日)

<全国 9 公演 2008 年 7 月 16 日~8 月 5 日>

主催：米国大使館 協賛：インド航空